

薬連ハイライム

次期参議院議員選挙における組織内統一候補が 神谷まさゆき参議院議員に決定！ —令和7年度臨時評議員会開催—

令和7年9月25日（木）AP日本橋において「令和7年度臨時評議員会」が開催された。

小山常任総務の司会で開会し岩月会長の挨拶に続き、逢坂誠二衆議院議員、本田あきこ参議院議員、神谷まさゆき参議院議員よりご挨拶をいただいた。

次に第27回参議院議員通常選挙で過去3回での最高得票を獲得した福島県、埼玉県、山梨県、石川県、福井県、岐阜県、静岡県、三重県、鳥取県、岡山県、山口県、徳島県、愛媛県、福岡県、佐賀県、長崎県、大分県、宮崎県、鹿児島県と前回選挙より大幅に得票した熊本県に対して岩月会長から感謝の辞が述べられ、その中で得票目標を上回った埼玉県、愛媛県、佐賀県、宮崎県、鹿児島県には岩月会長から感謝状が贈られた。そして、今回の選挙で全国最高得票を獲得した福岡県には川

田幹事長から特別賞が贈られた。

次に畑澤議長、久間副議長が登壇し会議成立の宣言、議事録署名人の指名が行われ、執行部から「令和8年度予算・税制改正要望」や「第27回参議院議員通常選挙結果」など重要事項について報告が行われた。議案審議では、「令和6年度会務並びに事業報告」、「収入支出決算報告」、「監査報告」、「次期参議院議員通常選挙対応について」の説明が行われ、質疑応答後採決が行われ、すべての議案が承認・議決された。

続いて、次期参議院議員通常選挙における組織内統一候補に決定された神谷まさゆき参議院議員から力強い決意表明があり、荻野副会長の閉会の挨拶で終了した。



オレンジ日記

女性局長としての総裁選挙

参議院議員・薬剤師
本田 顕子



10月4日、自民党総裁選挙が行われ、高市早苗候補が第29代総裁に選出されました。

5名の候補者が届出を行った今回の総裁選挙において、私は女性局長として貴重な機会を得て、様々な活動に関わることができました。

党青年局・女性局が主催した公開討論会では、中曽根康隆青年局長と共に司会進行役を務め、討論会冒頭の主催者を代表しての挨拶の中では、5名の候補者を目の前にして、新総裁には「力強いリーダーシップと政策力で自民党、国家国民を導いていただきたい」、そのためには「自分たちも全力で努力する」と党再生に向けた思いを込めました。

この一節は全国の女性局員とも議論を重ねて取りまとめた「自由民主党総裁選挙 女性局声明」を踏まえたものです。この声明では「国民の意識とのズレ」やアンコンシャスバイアスの一刻も早い解消と、名実ともに「女性の力」が発揮できる環境整備についても求めており、告示日当日に各候補者に手交させていただきました。

公開討論会の準備は入念に行い、あらかじめ逢沢一郎総裁選挙管理委員長からは「地方の声を聴く大切な機会」というお言葉をいただいていたので、一般質問について全国の青年局（部）と女性局（部）に募集を行い、数多くの応募を得て討論会当日の活発な議論につなげることができました。

本稿をご覧になる頃には、党内の新体制および政府内における比較第一党としての立ち位置などが定まり、他党との連携体制も見えてきているはずです。

今般の総裁選挙を経て、新総裁のもと総力を結集し、未来への不安を夢や希望に変える政策の実現を目指してまいります。

政 幸 だ よ り

病院薬剤師偏在解消への取り組み

参議院議員・薬剤師
神谷 政幸



2025年9月9日と10日の両日、石川県を訪問し病院薬剤師の偏在解消への取り組みを視察させていただきました。

9月9日石川県薬剤師会の乙田副会長、谷内事務局長とご一緒に、金沢大学附属病院薬剤部を訪問し、薬剤部長の崔吉道先生からお話を伺いました。患者のみならず医療者の高齢化や、医療介護福祉の需給ギャップが問題となっており、これらの問題は、将来さらに深刻化すると予想されています。薬剤師の偏在を解消する目的は、住民の健康を守る医療提供体制の確保にあります。

2018年、町立富来病院に初めて薬剤師の出向が行われました。その目的は単なる労働力の補完ではなく、薬剤師にとって魅力的な職場環境をつくることにありました。院長や町長とこの理念を共有し、全面的な協力を得ながら、課題の抽出、地域連携や薬薬連携のモデル構築、さらには地域での学びを大学病院での教育に活かす取り組みとしてスタートしました。続いて、2022年4月からは2番目の施設として宇出津総合病院への出向が始まりました。こうした取り組みが評価され、2024年6月の薬剤業務向上加算の新設へとつながっています。

9月10日、石川県薬剤師会の中森会長、崔副会長、橋本副会長、乙田副会長、森戸常務理事とご一緒に、宇出津総合病院を訪問しました。院長は出向によってがん化学療法が再開できたことを大変喜んでおられました。薬剤部の先生方は、大学病院との連携によって医薬品情報に関するパイプが太くなったことや、地域薬局との顔の見える連携が進んだことをメリットとしてあげておられました。出向された先生からは、退院時指導や事前合意プロトコルの運用を通じて、薬薬連携を実践的に経験できたとお話を伺いました。薬剤業務向上加算が新設され、これらの取り組みが全国で始まっています。病院と薬局との連携が行われ、地域全体の薬剤業務の向上につながるようしっかりと後押しさせていただきます。